

# 福井市高雄神社石造多層塔の研究

古川 登

## はじめに

越前地方における中世の石造多層塔は、基礎上面に宝篋印塔の基礎と同様の段形を持つことを指標とする越前式石造多層塔<sup>①</sup>が主体である。越前地方以外の石造多層塔で、宝篋印塔と同様の段形を持つ基礎は認められていない。この越前式石造多層塔<sup>②</sup>が主に分布する地域は、敦賀を除く狭義の越前地方の北部である。越前地方以外では若狭地方<sup>③</sup>と加賀地方<sup>④</sup>に数基が認められるが、これは越前地方から搬出、あるいは笏谷石工が出張製作したものである。

この越前式石造多層塔の中で、高雄神社石造多層塔（以下、高雄神社塔と呼称）は、姿を留める石造多層塔の中で最も古い紀年銘を持つものであり、越前地方における石造塔編年の基準資料である。また、高雄神社塔の塔身には造立の目的を記した願文が彫られてお

り、中世の石造多層塔の造立目的が判明する稀な例である。

本稿はかかる高雄神社塔について、紀年銘と塔身装飾の様式編年、願文から論じることとする。

## 一 若干の用語について

本論に入るに先立って、若干の用語について解説しておく。

「**塔身装飾**」 塔身装飾は、基本的には塔身に刻まれた装飾を言い、月輪・蓮華座・梵字・仏像などの紋様によって構成される。加えて、この塔身装飾は多層塔や宝篋印塔の塔身、五輪塔水輪など塔身部にみに施されるものではなく、宝篋印塔の隅飾、五輪塔地・火・空風輪、板碑他にも施されるものである。石造塔を仏教的に意味付ける装飾という概念として「**塔身装飾**」を定義する。梵字・月輪・蓮華座の組み合わせは塔身装飾の一例であり、蓮華座上に配された細線

陽刻圏線月輪の周囲に小花弁を配する越前式荘嚴・越前式裝飾、あるいは越前式文様と過去に呼ばれた裝飾は、このことにおいて越前式塔身裝飾と呼ぶこととする。

「蓮華紋」 蓮華紋は、平面・立体を問わず、蓮弁が上方を向いているものを請花、下方を向いているものを反花と呼称する。そして、蓮弁の単位が一弁のものを単弁、二弁のものを複弁と呼び、蓮弁間の小弁を間弁と呼称する。次いで、弁が二重になっているものを重弁と呼称し、それを欠くものを素弁と呼称する。したがって重弁単弁、素弁単弁と呼称することとなる。

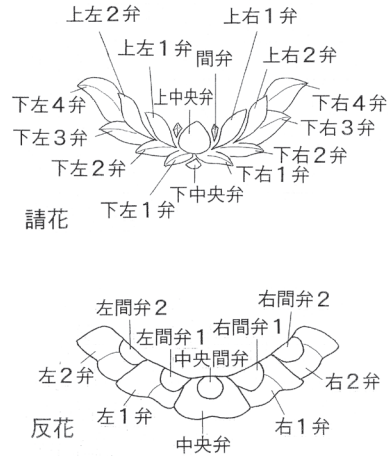
「梵字」 梵字は言を要するまでもなく文字であるが、ここでは塔身裝飾を構成する一要素Ⅱ紋様と認識する。裝飾性の全くない通常の梵字を「普通梵字」と呼び、梵字の字画の周囲に線をめぐらせて輪郭を際立たせた梵字を「加飾梵字」と呼ぶ。

多層塔および塔身裝飾の各部位の呼称は第1図・2図に図示したとおりである。

## 二 高雄神社塔研究略史

高雄神社塔に関する最初の文献は、上田三平編一九二一年『福井県史跡勝地調査報告第二冊』<sup>5)</sup>である。第三章の越知山遺跡泰澄石塔で「西安居村本堂薬師堂前面の正應の刻銘ある多重石塔に類す」と記述され、一〇七頁の若越主要金石年表に正應三年・多重石塔・西安居村本堂と記されているのが高雄神社塔のことである。

古川 福井市高雄神社石造多層塔の研究



第1図 塔身裝飾名部の名称

高雄神社塔を取り上げた最初の論考は、増永常雄一九五七年「越前高雄神社七重石塔」<sup>6)</sup>である。増永は、基礎の上面が宝篋印塔の基礎に似ていることから当初の部材であるかどうか判断を保留する。軸部は三面に種子、他の一面に記年銘を陰刻、月輪の中に薬研彫りの種子、正面キリク、向って右側サ、左側サクの彌陀三尊を刻むことを記述。願文は「爲慈父幽靈成佛也／正應(三)天眞南侶□(日)／

□子□□／敬白」と判読する（願文の／は改行を表したが、増永の本文にはない。以下、／は同様の意図で用いることを断っておく）。笠は「軒の隅にいくに従い自然に力強く反轉し、鎌倉時代末期の特色―略―各層の通減率もそれ相應に整っているので当初のものと考えられよう」とし、相輪のみを後補であることを指摘する。

石材については大谷寺九重石塔及び圓山石造寶塔は風化度の少ない別畑石を用いているのに対して、高尾神社塔は風化度の多い笏谷石を用いていると疑念を示している。そして、願文の「年」の異字を「天」とする方法は江戸時代に多いという川勝政太郎の指摘をあげ、加えて「爲慈父幽靈成佛也」という表し方が鎌倉時代に存在したかどうかと、正應三年の遺品であることに疑念を呈しつつも、「紀年銘を信ずると越前最古の石造遺品であり、造立趣旨の明瞭な、しかも笏谷石を用いている重要な遺品である。大谷寺九重石塔を廻ること三十餘年前に彌陀種子を初重軸部に刻む手法のあることは、早くより越前地方に彌陀信仰の盛んであったことを如實に物語っているといえよう」と結ぶ。

川勝政太郎一九七九年「越前石の地方進出」<sup>7)</sup>は、高雄神社塔が別畑石を用いていること、屋根の軒反りの様式などから鎌倉時代後期の造立であることが知られること、初層軸部軸部背面に「爲慈父幽靈成佛也、正應三天<sup>8)</sup>南侶□日、孝子敬白」の刻銘があつて、正應三年八月の建立であることが明らかであると言ひ、増永が笏谷石とした石材を別畑石とし、増永の願文への疑念も触れていない。

三井紀生一九九九年「越前石製多層塔塔身の変遷について」<sup>8)</sup>は、

越前石製多層塔を鎌倉時代から江戸前期にかけて三期に区分し、その中で高雄神社塔を七重塔とし、「この時代の多層塔の特徴は塔身の大きさに較べて笠は軒が小さく、厚く反りも少なく重量感はあるが、一方では、安定感に欠ける感がある」という。

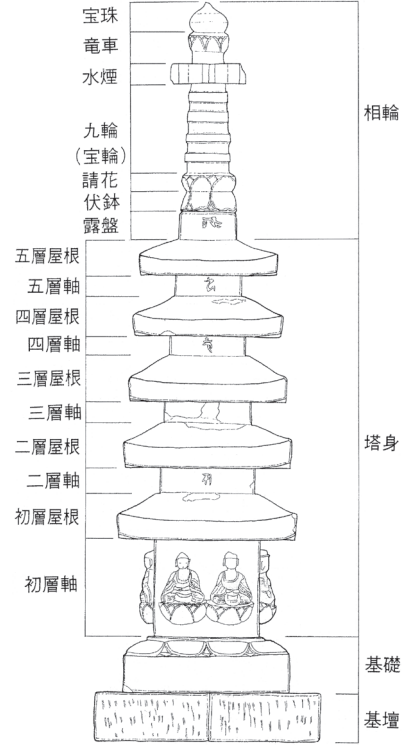
三井紀生二〇〇二年『越前笏谷石』<sup>9)</sup>の高雄神社多層塔とその他の遺品では「―略―笏谷石製の七重塔―略―紀年銘ある笏谷石の多層塔では現状越前最古のものである。塔の高さは二・四メートルで、三重の基礎の上に塔身を置きその上に七重の笠を重ねている。相輪は失われ、最上層笠の上には箱型の水烟、請花および宝珠が乗せられている」と記述し、九輪のことを相輪と記述しているようで、相輪の九輪以下が失われ、水烟・請花・宝珠が残存していると考えているように捉えられる。次いで「塔身の側面三面に蓮華座上に小連弁をめぐらせた月輪が配置され、その中に弥陀三尊の梵字種子が薬研彫りされている―略―塔身背面には「爲慈父幽靈成佛也正應三天庚寅□南侶 子□□ 敬白」と彫られており」と記述する。

三木治子二〇〇二年「越前式月輪の石造物・編年の試み（一）」<sup>10)</sup>では「相輪を失うだけで本堂右手に立つ」と記し、相輪以外は当初の姿を留めているとする。そして「七重塔は二〇九センチ、基礎上は宝篋印塔のそのように二段となる。この地方の全ての層塔が同様である。塔身はキリーク三尊を三面にわたって彫り、三尊とも請花座様式である。この塔身で面白いのは中尊の月輪径（二三センチ）より、脇侍のそれ（二四・五センチ）の方が大きいことである。常識的にいえばこの逆であろう」とする。願文は「爲慈父幽靈成佛也

**高尾神社の概要** 高雄神社は『福井県神社誌』<sup>①</sup>によれば、福井市本堂町に鎮座し、祭神は天忍穗耳尊と大己貴命を祀る。例祭は一月一〇日である。高雄権現略縁起に泰澄が養老元（七一七）年三月

**三 高雄神社・高雄神社塔の概要**

／正応三天庚寅南侶晦日／教子ホ／敬白」と判読する。  
二〇〇三年九月、古川と村上雅紀は実測図の作成されていなかった高雄神社塔の実測を高雄神社の許可を得て行った。その実測図は翌二〇〇四年「越前地方における石造多層塔の研究」<sup>②</sup>に掲載し、一覧表に残数七と記して七重塔でないことを明記した。また、本論中で願文を「爲慈父幽霊成佛也／正應三天庚寅南侶晦日／教子正／敬白」と判読を記したが、後述のように「教子正」は誤読である。



第2図 多層塔各部の名称

に高雄山頂で仏像を刻み高雄権現を祭ったとある。その後、光仁三（八一二）年、藤原藤嗣が本殿拜殿を改築。保元三（一一五八）年、藤島城主林六郎大夫光明と押領使藤原国貞の間の戦で破壊され荒廃した。その後、文治五（一一八九）年に波多野義重により再建。天正三（一五七五）年、織田信長に焼かれ、同一八（二五九〇）年に再建。その後、高雄山にある奥宮の高雄大権現を里宮の白山宮に降し、その跡地を白山神社としたという。

**高雄神社塔の概要** 高雄

神社塔は、高雄神社本殿右脇の一段下がった平坦面に建てられている。石材は、塔身や屋根材下面を観察すると、白色・濃緑色の礫を



第3図 高雄神社石造多層塔位置図

含む淡青緑色を呈する火山礫凝灰岩で、笏谷石とみてよい。現在の姿は七重塔を呈している。下部から段形を持つ基礎・初層塔身・屋根とその上部の塔身を一体成形した屋根材七層、最上部に載せられた半裁された宝珠様の部材からなる。この部材は増永<sup>6</sup>、三井<sup>(8)</sup>の調査時の部材と異なることが写真から判断される。

現状では基礎があるようにみえるが、コンクリートで造られたものであり、当初の基礎は存在を確認することが出来ず、亡失したものとみられる。このことから高雄神社塔の現在の位置が当初の造立位置でないことをうかがうことが出来、高雄大権現を里宮の白山宮に降したという『福井県神社誌』<sup>11</sup>の記述と合致する。すなわち、高雄神社塔は高雄山にあった奥宮の高雄大権現に造立されたものであった可能性が高いと考えられる。

相輪は、その小さな破片すら認めることが出来ず、これも亡失している。増永一九五七の写真では一石五輪塔の空輪・火輪が載せられているように見える。三井が箱型の水煙・請花および宝珠と報告した物もこれと同じであろう。三井の写真は空輪が欠けているが水煙としたものは一石五輪塔の火輪で、請花および宝珠としたものは空風輪であり、本来の相輪の宝珠・竜車・水煙でないことは指摘できる。これは増永一九五七<sup>6</sup>、三木二〇〇二<sup>10</sup>で相輪が後補、失われているとする記述と合致する。なお、この一石五輪塔も現存しない。

高雄神社塔の現在の高さは、後補の宝珠様の部材と基礎を除いた高さ二・二二mを測る。なお、塔の高さが報告者によって異なるのは、実測と略測による違い、ないし後補の石材を加えた数値で、本稿の

数値が実測値で正しい。以下、部材ごとに解説を加える。

**基礎** 基礎は、宝篋印塔の基礎に共通する段形を持つている。基礎下部の幅六六cm・同部の高さ一七cm、基礎上部の幅五〇cm・同部の高さ九cmを測り、基礎の総高は二六cmある。段形の段は二段あり、一段目段形の幅五八cm・同部の高さ四・五cm、二段目段形の幅五〇cm・同部の高さ四・五cmを測る。

**塔身** 塔身は方形を呈し、幅三九cm・高さ三八cmを測る。正面・右面・左面に塔身装飾を配し、背面に四行二十三文字からなる願文を彫る。

**塔身装飾** 塔身装飾は、素弁単弁の請花の蓮華座に小花弁を周囲に配した細線陽刻圏線月輪を載せる越前式塔身装飾である。月輪に配された小花弁は蓮華座上に配されず、月輪を全周しない。蓮華座、月輪、小花弁は陽刻で、葉研彫りの梵字のみが陰刻である。梵字の彫りの深さは、幅三cmに対して深さ一cm余りで浅い葉研彫りである。梵字は普通梵字で、正面の月輪内にキリク（阿弥陀如来）、右面の月輪内にサ（聖観世音菩薩）、左面の月輪内にサク（勢至菩薩）が彫られており、阿弥陀三尊を表すものとなっている。

月輪の径は正面―縦二三・四cm・横二三・八cm、右面―縦二四・二cm・横二四・八cm、左面―縦二四・八cm・横二五・二cmを測り、正面の主尊の月輪径が大きくないことがわかる。そして、月輪の周囲に配された小花弁を入れた径は正面―二六・八cm、右面―二八・〇cm、左面―二八・二cmで、やはり主尊の装飾の径が小さいことを指摘できる。これに加えて月輪の周囲に配された小花弁の弁数を数えると、正面

―五四弁、右面―欠損により六〇弁残存、左面―六七弁を数え、小花弁の弁数も月輪の径に比例して主尊のものより脇侍のものの方が多いことを指摘でき、主尊の塔身装飾を大きく作ろうとしていないことがうかがえる。

請花の蓮華座の幅は正面―二五・五cm（復元幅二六・五cm）、右面は欠損のため不明であるが、残存する上中央弁から右下第四弁までの幅を倍にした数値（復元幅二六・八cm）、左面―二五・二cmであり、請花の蓮華座の幅も一定していないことを指摘することが出来、月輪の径、小花弁の弁数の差などの違いも併せて考えれば、塔身装飾を同じ大きさで彫ろうとしているようには思われない。

**願文** 願文は、塔身の背面に「爲慈父幽霊成佛也／正應三天庚寅南侶晦日／教子ホ／敬白」と彫られている。正應三天の天は年の異体字、教子の教は孝の異体字、ホは等の異体字である。読み下すと「優しい父の幽霊が成仏する為／正應三年庚寅八月三〇日／親孝行な子供たち／敬白」となり、願文と塔身装飾から父の幽霊の成仏を阿弥陀三尊に願って立てた石塔と理解できる。

これまでの願文の判読を時系列に並べると、増永一九五七<sup>6</sup>「爲慈父幽霊成佛也／正應（三）天庚寅南侶□（日）／□子□□／敬白」。川勝一九七九<sup>7</sup>「爲慈父幽霊成仏也、正応三天庚寅南侶□日、孝子敬白」。三井二〇〇二<sup>9</sup>「爲慈父幽霊成佛也正應三天 庚寅□南侶 子□□敬白」。三木二〇〇二<sup>10</sup>「爲慈父幽霊成仏也／正応三天庚寅南侶晦日／教子ホ／敬白」。古川・村上二〇〇四<sup>2</sup>「爲慈父幽霊成佛也／正應三天庚寅南侶晦日／故子正／敬白」と各氏で微妙に異なるが、三木

二〇〇二<sup>10</sup>の判読が正鵠を射ている。

古川・村上二〇〇四<sup>2</sup>の判読「爲慈父幽霊成佛也／正應三天庚寅南侶晦日／故子正／敬白」のうち三行目を故子正と判読したのは、故の字は教の字に部首が似ており、正は直線的なところがホと似ているからと言え、漢字で似た直線的なものを探して正と考えたのである。その後、故は教を読み違えていたことに気づき、教子正と判読したが、『石造物研究会第13回研究会資料集北陸の石造物―研究の現状と課題<sup>12</sup>』の編集時に、この願文の判読を新潟県胎内市教育委員会の水澤幸一氏の教示によって、教は孝の異体字、正はホで、ホは等の異体字であるとの指摘をいただき、三木二〇〇二の判読が正鵠を射たものであったことを追認した。

**屋根材** 屋根材は七点の部材がある。上部の塔身と一体成形した一体成形型の屋根材で、垂木の表現についてはこれを欠く。軒先の隅は反りが施される。

一層目の屋根の幅五九cm・高さ二〇cm、その上部の塔身の幅三七cm・高さ六cm。二層目の屋根の幅五五cm・高さ一七cm、その上部の塔身の幅三四cm・高さ六cm。三層目の屋根の幅五二cm・高さ一七cm、その上部の塔身の幅三二cm・高さ五cm。四層目の屋根の幅四九cm・高さ一六cm、その上部の塔身の幅三〇cm・高さ四cm。五層目の屋根の幅四五cm・高さ一四cm、その上部の塔身の幅二八cm・高さ五cm。六層目の屋根の幅四四cm・高さ一五cm、その上部の塔身の幅二七cm・高さ五cm。七層目の屋根の幅四一cm・高さ一四cm、その上部の塔身の幅二八cm・高さ四cmを測る。

各層の屋根を観察すると、現在の一層目と二層目、三層目と四層目の間に低減率の異常を認めることが出来る。一層目と二層目の間に見られる低減率の異常は、木造塔において一層目の屋根を上層の屋根より大きく作ることが一般的であるので、この部分の低減率の異常は木造塔のそれを模したものと考えられる。三層目と四層目の間にみられる低減率の異常は、この層の間にあった一層が抜けていることを示している。また、現状の七層目も最上部の屋根材とは考えられない部材であるので、この上にあった一層が抜けていることがわかる。よって、高雄神社塔には七層以上の屋根が存在したことを指摘することが出来、本来の姿が七重塔ではないと解することが出来る。

高尾神社塔が七重以上の塔であれば、九重塔ないし十三重塔と考えられるが、越前地方の多層塔で十三重塔は近世の事例しか認められない。中世の多層塔では五・七・九重塔の存在が確認され、高雄神社塔に七層以上の屋根が存在することは確実であるので、九重塔に復元することが最も蓋然性が高いと考える。

第四図bは高雄神社塔の失われた部材を、十三世紀代の石塔の部材を当てはめて復元したものである。復元される基壇の高さ一二cm、基礎の高さ二六cm、塔身の高さ三八cm、復元される九層の屋根材の高さ一九一cm、復元される相輪の高さ七八cmで、復元される総高は三四五cm、三・四五mに復元できる。

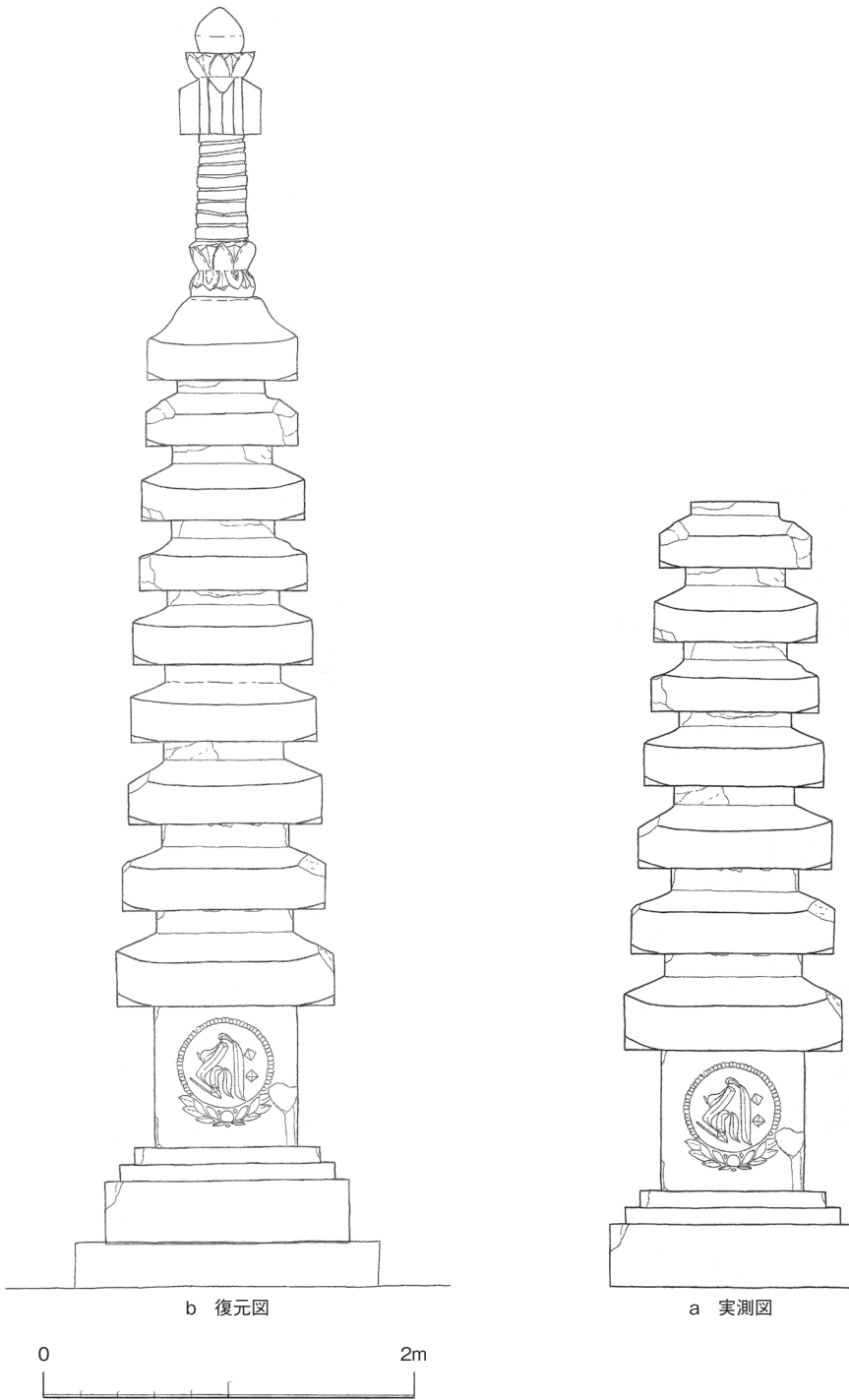
**石材** 石材は先述したように、白色・濃緑色の礫を含む淡青緑色を呈する火山礫凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。増永は笏谷石と

し、川勝<sup>⑦</sup>は何故か別畑石としている。石材は風化し汚れた部位は濃い緑色に見えなくもないが、風化の弱い部位は淡い青緑色である。

増永<sup>⑥</sup>・川勝<sup>⑦</sup>が別畑石と認識した大谷寺九重塔と円山宝塔の石材は、高雄神社塔の石材と比較するとやや暗い青緑色を呈するが、濃緑色・白色の角礫を含む火山礫凝灰岩で、疑いなく笏谷石である。いずれも褐色系の凝灰岩ではないので、増永と川勝が大谷寺九重塔・円山宝塔の石材を別畑石と認識したことは理解に苦しむ。

別畑石は、淡い褐色を呈する火山礫凝灰岩で、色調以外は笏谷石と変わるところはない。しかし、別畑石のばあい包含する礫の色調も褐色系の礫のみからなり、笏谷石のように青緑色・白色の礫は含まない。このように笏谷石と別畑石は、母岩の色調も包含する礫の色調も異なっている。したがって、青緑色の笏谷石を褐色の別畑石と誤ることは通常では考え難い誤認である。その誤認の理由については、大谷寺九重塔・円山宝塔の石材を誰かが増永と川勝に別畑石であるという誤った情報を伝えた可能性が高い。しかし、それでも川勝<sup>⑦</sup>が高雄神社塔の石材を別畑石としたことは理解できない。

なお、越前地方の石塔は十二〜十三世紀後葉までは笏谷石製に限られ、十三世紀末から笏谷石以外の石塔の製作が越前南部、北部の加越国境周辺で開始される。しかし、別畑石で作られた石塔で中世に遡るものは現在の段階では未確認である。そして、今日では増永・川勝が別畑石を用いていると報告した大谷寺九重塔、円山宝塔、川勝が別畑石と記述した高雄神社塔の石材を別畑石であると主張する研究者は誰もいない。



第4図 高雄神社石造多層塔実測図・復元図 (S = 1/20)



## 四 高雄神社塔の様式

高雄神社塔は、基礎に段形を持つ越前式石造多層塔である。その塔身裝飾は、請花の蓮華座上に小花弁を周圍に配した細線陽刻圈線月輪を載せる越前式塔身裝飾である。小花弁は蓮弁で止まって、月輪を全周しない。蓮華座の花弁の弁数は、上部花弁片側二葉、下部花弁片側四葉で、間弁は上中央弁と上第一弁の間にしかないもので、一二六〇年頃に成立した様式であり、中世前期の越前式塔身裝飾である。

梵字字画の特徴は、キリク・サ・サクの第一画の命点がそれに続く横画の上半部に彫られる。キリク第五画が第四画の下端に当たって止まっています、かつ第四画と第五画が彫り分けられている。サ・サクの第三画は第四画に接する部分は直線的に伸び、直角に下方に折れる形状である。キリク第七・八画の涅槃点が第六画に接していること、サクの第五・六画の涅槃点が第四画に接してい



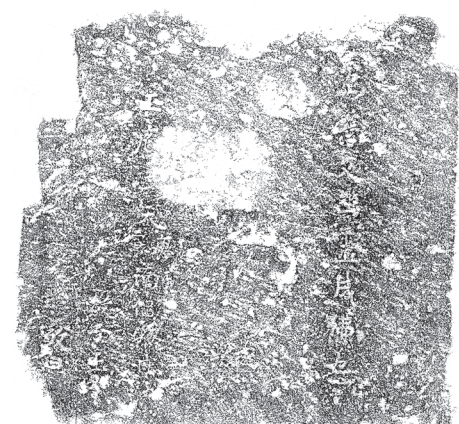
左面 (サク)



正面 (キリク)



右面 (サ)



背面 (願文)

第5図 高雄神社石造多層塔塔身拓影

ること、梵字にみられる字画の形状は、文永十一（一二七四）年銘井向白山神社板碑<sup>(2)</sup>の梵字に後出する要素を持ち、元應元（一二一九）年銘天池日吉神社塔<sup>(2)</sup>、元享三（一三三三）年銘大谷寺九重塔<sup>(2)</sup>の梵字に先行する要素を持つことを指摘できる。

したがって、高雄神社塔の梵字字画の型式はⅡ型式2段階で、その型式組列は第六図のとおりであり、梵字の様式と正應三天という紀年銘は調和的である。

また、梵字の葉研彫りの深さは、幅3cmに対して深さ1cm余りで浅い葉研彫りであることも鎌倉時代という製作時期と調和的である。平安時代後期のものはもっと浅く、一六世紀の梵字は字画の幅より深さが勝るようになっていく。すなわち梵字の葉研彫りの深さは、字画の幅に対して浅いものから始まって、幅に対して深いものへと変化しているのである。ただ、この梵字の彫りの深さという指標は、現在の段階で把握している資料数では古代・中世前期・中世後期といった程度でしか区分することが出来ない。

次いで、高雄神社塔の屋根が増永<sup>(6)</sup>・川勝<sup>(7)</sup>とも屋根の軒反りの様式などから鎌倉時代後期である

	命点 (第一画)	キリーク第三画	キリーク第四・五画	サ・サク第三画	アーンク	アーンク
I-1						
I-2						
I-3						
II-1						
II-2						
II-3						
II-4						
II-5						
II-6						
II-7						

第6図 梵字の型式組列

と主張するのであるが、その根拠を示してはいない。屋根の様式から鎌倉時代と主張しつつも、紀年銘からそう認識しているように思われる。

増永・川勝の言う鎌倉時代の多層塔の屋根、高雄神社塔・大谷寺九重塔については、「越前地方における石造多層塔の研究」<sup>2)</sup>で図示した多層塔の屋根材を見る限り、十三世紀～十六世紀にかけてみられる多層塔の屋根の形状が大きく異なるようには観察されない。したがって、高雄神社塔の屋根の形状をもって鎌倉時代と指摘することは誤謬と言える。

あるいは、増永・川勝が多層塔屋根材の時系列上での変化を把握していたとしても、越前地方以外の多層塔の屋根で作ったモデルを、越前地方の多層塔に当てはめることは方法論として誤っている。

むろん、増永・川勝の時代に越前地方において鎌倉時代の多層塔も、それ以後の多層塔もあまり知られていなかったことが原因であることは理解できるが、笏谷石製多層塔における屋根の形状の変化は、笏谷石製多層塔からしか導いてはならないのである。

資料の多寡、研究の方法論、越前地方の石塔研究における目的問題意識の違いなど、増永・川勝の時代と、現在の私たちの時代とは、その違いが小さくないことは確かである。したがって、現在の進んだ研究の状況下において、研究史上の増永・川勝の業績を批判、否定するものではないことは断っておく。

## 五 高雄神社塔の願文について

高雄神社塔の願文は、「爲慈父幽霊成佛也／正應三天<sup>庚</sup>南侶晦日／教子ホ／敬白」と彫られている。願文から正應三年八月三〇日に父の幽霊が成仏するために子供たちによって立てられた供養塔である。ただ、誰を供養するためのものなのか、慈父としか記されておらず判明しない。そして、願主も教子ホとしか記されていないため、親孝行な子供たちであるとはわからない。十三世紀～十四世紀の供養塔の銘文を瞥見すると、供養塔に被供養者及び願主の俗名が記されたものを見ることはない。願主名が記されているものは、僧侶の名前あるいは法名であることが彫られた名前から窺えるが、深谷町五輪塔地輪の右志者為比丘尼報身也と名を彫らないものもある。

墓塔か供養塔か明言することは避けるが、越前町織田法楽寺の親尊墓五輪塔地輪は□親尊阿聖霊／正應三年<sup>庚</sup>二月十九日未剋と彫っている。親尊は俗名である可能性の高いことが堀大介によって指摘されている。<sup>15)</sup>正應三年<sup>庚</sup>二月十九日未剋と彫られた日時が親尊の亡くなった日時であることが背面の孝子（七）月晦が石塔の造立日であることからわかる。しかし、親尊墓五輪塔地輪も孝子としか願主の名を記していない。

越前町大谷寺の大谷寺一号地輪<sup>15)</sup>は、観應一季二月五日<sup>卯</sup>とだけ彫られており、こちらは俗名・法名・願主の名も記していない。観應一季二月五日<sup>卯</sup>時という紀年銘は、時刻が記されていることにおいて、石塔の造立日時である可能性は低いと考える。親尊墓五輪塔の





- (10) 三木治子二〇〇二「越前式月輪の石造物・編年の試み(1)」『歴史考古学51』歴史考古学研究会
- (11) 福井県神社庁編一九九四「高雄神社」『福井県神社誌』福井県神社庁
- (12) 古川登・御嶽貞義・堀大介編二〇一二『石造物研究会第13回研究会資料集 北陸の石造物―研究の現状と課題―』石造物研究会
- (13) 慶長十五(一六一〇)銘吉峰寺法華塔・残教九、註2文献実測図所収
- (14) 古川登・堀大介二〇一二「親真墓五輪塔の基礎的研究」『越前町織田文化歴史館 館報第7号』越前町教育委員会
- (15) 古川登二〇一一「越前町大谷寺所在石塔群の調査」『越前町織田文化歴史館 館報第6号』越前町教育委員会
- (16) 清水邦彦・古川登二〇一二「赤坂白山神社板碑の検討―越前国赤坂新善光寺の所在地を巡って―」『日引第13号』石造物研究会